

ひとりひとりの子どもを見つめて (最終回)

赤羽美代子

一年の後半を迎える頃、子どもたちは、お互いに「ことば」を媒介としながら遊びを發展させていく事は、少なくともあったようです。お互いの人間関係が成立してきたのでしょう。相手の心を聴き「ことば」の背後にある感情を聴きながら、互いに心の中の訴えを吐き出しているようです。(おとなは、相手の「ことば」の音を聞く傾向があるようです)

秋も晩秋を迎えたある日、子どもたちと、上野の、子ども動物園に行きました。教師はこの計画を立てた時から、動物と子ども結びつきに、中心を絞り、その事に心を奪われていたようです。一方、子どもたちは、動物との交流は二番目で、園内を走るモノレールに、すっかり心を奪われてしまいました。

その日、青空が美しく、モノレールの走る姿が青空に映えて、さながら、モノレール日和といった好天気でした。そのモノレールが秋の陽光を浴びて、姿を現わした時、子どもたちは、歓声を上げて歩をとめました。

「あつ、モノレール！」

「私、あれに乗った事がある」

「モノレールに乗ると、動物園がゼーんぶ、見えるんですよ？」

突然、よく通る力強い声の持ち主、五歳児U子の「先生！きょうモノレールに乗るんでしょう？」の質問に、三十八の瞳がキラッと輝き、私の顔を見据えます。

私は「そうね、モノレールに乗ると、帰りが遅くなるのよ」

と、自分に言い聞かせながら、曖昧な返事をしました。私もとっさの事なので、心の中では「子ども動物園とモノレールを組み合わせると、解散時間が十二時過ぎになるのでは？」

(其の日の解散時間は園庭十一時半) 「それともモノレールに乗せてしまい、余りの時間で動物との交流？」 「いやいや、それは計画外の事だし、事故があつては……と、ぐるぐると幾つかの事を思い巡らしました。

とにかく、今は予定通りにと、ぐっと気持ちを押さえて、全員、子ども動物園へ向かいました。その間、教師と子どもたちは、静かに、もくもくと歩きました。多分、子どもたちは、モノレールの事を思いながら……。私は、私で、これで良かったのかな？ と、心の葛藤をしながら……。

それから一時間程、子どもたちは、モノレールを忘れて、動物と交流しました。

やがて、子ども動物園とも別れを告げて、動物園の出口に向かうため、帰りの歩を進めている時、私の後ろ姿に、U子が強い語調で「先生！ モノレールには、いつ乗るの？」他の子どもたちも「モノレールに乗るんでしょう？」と抗議します。

私「きょうは、モノレールには乗らないわよ」

「えー、先生の嘘つき！ モノレールに乗るって言ったでしょう」

「いいえ、言わないわ」

「言いましたー」こんなに、はつきりと「言いました」と、子どもたちに言われると、私は、先程、夢遊病者のようになって「帰りには、モノレールに乗りましょうね」と、口走ったのだからと帰りのバスの中で、ふと変な感じになりました。

翌日、四、五歳児、五、六名で「幼稚園ごっこ」遊びをしています。動物園に行った時の再現をしているのです。

「A先生、モノレールに乗りましょう」と、園児になった子どもが、A先生になつたらしい五歳児、Y子に言いました。

Y子「そうね。乗りたいわね。でも、どうしようかな？」と、考えます。

子ども「動物園より、モノレールに乗りたい！」

Y子、顔をちょっと困らせて「そうね、帰りが遅くなつて、お腹がすいても我慢するのよ」

子ども「うん、私、夜まで食べなくても、へーいき」とえぼる。

Y子「じゃー、急いで乗りましょう。そして乗ってから、

動物の所へ行きましょう」

「ハイ」と、全員積み木のモノレールに乗り込みました。どの子も、大変に満足そうです。

どうやら、あの日の私の内心の動揺を、Y子は幼稚園ごっこの中で、再現しています。子どもたちは、私の困った時の口調から、案内した時のトーン・ボイスから、考えながら歩く私の姿から、すべてを心で聴きとっていたのです。そして、子どもの期待が脹らんで、先生はきつと乗せてくれると思う自分の思いが反映して「先生は、乗せてあげると言いました」と表現したのではなかったかと、子どもたちの「ごっこ遊び」を通して、何か目が開かれたような思いがしました。

このような、教師と園児、おとなと子どもの食い違いは、毎日の保育の中で、大なり小なり何回もあります。教師が語った「ことば」は、味気ない「記号」にすぎなかったと、しみじみと反省をする毎日ですが、子どもたちは、その「記号」を、ちゃんと心で聴いて記号にすぎないと思われた「ことば」に意味を与え、意味を持たせて、自分の心と混ぜ合わせ、視野を大きく広げてくれます。(これは、幼児と教師の

信頼関係による事と思われませんが)

一年間の歩みを重ねて、幼児の成長を見る時、子どもたちは、相手の「ことば」を、どのように聴き、反応して、遊びを展開し、持続していくのかを、それぞれの遊びの中で繰り広げてくれます。

私たちおとなも、その事柄を聞き、形として整えて、解決するのでなく(形の表現は心より離れる事を強く感じました)耳を傾けて、心して聴き、その幼き者の魂の配慮に、全身を生かしてかわる時にこそ、生きた者が産まれると信じますし、又、そういう保育者でありたいと願い、祈らずにはいられません。

(霊南坂幼稚園)

